

夏目漱石

京に着ける夕



京に着ける夕

汽車は流星の疾はやきに、二百里の春を貫いて、行くわれ
 を七しち条じょうのプラツトフォームの上に振り落す。余よが踵かかとの
 堅たき叩たたきに薄寒く響いたとき、黒きものは、黒き咽喉のどか
 ら火の粉こをぱつと吐いて、暗い国へ轟ごうと去った。
 たださえ京は淋さびしい所である。原に真葛まくず、川に加茂かも、
 山に比叡ひえと愛宕あたごと鞍馬くらま、ことごとく昔のままの原と川と
 山である。昔のままの原と川と山の間にある、一いち条じょう、
 二に条じょう、三さん条じょうをつくして、九く条じょうに至つても十条に至つて

も、皆昔のままである。数えて百条ひやくじように至り、生きて千年に至るとも京は依然として淋しかろう。この淋しい京を、春寒はるさむの宵よいに、疾とく走る汽車から会釈なく振り落された余は、淋しいながら、寒いながら通らねばならぬ。南から北へ——町が尽きて、家が尽きて、燈ひが尽きる北の果はてまで通らねばならぬ。

「遠いよ」と主人が後うしろから言う。「遠いぜ」と居士こじが前から言う。余は中の車に乗って顫ふるえている。東京を立つ時は日本にっぽんにこんな寒い所があるとは思わなかった。昨日きのうまでは擦すれ合う身体からだから火花が出て、むくむくと血

管をむりに越す熱き血が、汗を吹いて総身に煮浸み出はせぬかと感じた。東京はさほどに烈しい所である。この刺激の強い都を去って、突然と太古の京へ飛び下りた余は、あたかも三伏さんぷくの日に照り付けられた焼石やけいしが、緑の底に空を映さぬ暗い池へ、落ち込んだようなものだ。余はしゅつという音とともに、倏忽しゅつこつとわれを去る熱気が、静しずかなる京の夜よに震動を起しはせぬかと心配した。

「遠いよ」と言った人の車と、「遠いぜ」と言った人の車と、顫かじえている余の車は長き轆かじを長く連ねて、狭せばく細い路みちを北へ北へと行く。静かな夜よを、聞かざるかと輪りんを

鳴らして行く。鳴る音は狭せばき路を左右に遮さへぎられて、高く空に響く。かんかららん、かんかららん、という。石に逢あえばかかん、かからんという。陰気な音ではない。しかし寒い響ひびきである。風は北から吹く。

細い路みちを窮屈きうくつに両側から仕切る家はことごとく黒い。

戸は残りなく鎖とざされている。ところどころの軒下に大き

な小田原提灯おだわらぢようちんが見える。赤くぜんざいとかいてある。

人気ひとけのない軒下にぜんざいはそもそも何も待ちつつ赤く

染まっているのかしらん。春寒よの夜を深み、加茂川の水

さえ死ぬころを見計らって桓武天皇かんむてんのうの亡魂でも食いに来

る気かもしれぬ。

桓武天皇の御宇ぎょううに、ぜんざいが軒下に赤く染め抜かれ
 ていたかは、わかりやすからぬ歴史上の疑問である。し
 かし赤いぜんざいと京都とはとうてい離されない。離さ
 れない以上は千年の歴史を有する京都に千年の歴史を有
 するぜんざいがなくてはならぬ。ぜんざいを召したまえ
 る桓武天皇の昔はしらず、余とぜんざいと京都とは有史
 以前から深い因縁で互に結びつけられている。はじめて
 京都に来たのは十五六年の昔である。その時は正岡子規まさおかしき
 といっしよであった。麩屋町の柊屋ひいらぎやとかいう家へ着い

て、子規とともに京都の夜を見物よるに出たとき、はじめて
 余の目に映ったのは、この赤いぜんざいの大提灯である。
 この大提灯を見て、余はなにゆえかこれが京都だなと感
 じたぎり、明治四十年の今日に至るまで決して動かない。
 ぜんざいは京都で、京都はぜんざいであるとは余が当時
 に受けた第一印象でまた最後の印象である。子規は死ん
 だ。余はいまだに、ぜんざいを食ったことがない。実は
 ぜんざいの何物たるかをさえ弁わきまえぬ。汁粉しるこであるか煮ゆで
あずき小豆であるか眼前ほうふつに髣髴する材料もないのに、あの赤い
 下品にくぶとな肉太な字を見ると、京都を稲妻いなずまの迅すみやかなる閃ひらめき

のうちへちまに思い出す。同時に——ああ子規は死んでしまった。糸瓜へちまのごとく干枯ひからびて死んでしまった。——提灯は
 いまだに暗い軒下にぶらぶらしている。余は寒い首を縮
 めて京都を南から北へ抜ける。

車はかんかららんかに桓武天皇の亡魂を驚かしたてまつ
 って、しきりに馳かける。前なる居士は黙って乗っている。
 後うしろなる主人ことばも言葉ことばをかける気色けしきがない。車夫はただ細
 長い通りをどこまでもかんかららんと北へ走る。なるほ
 ど遠い。遠いほど風に当らねばならぬ。馳かけるほど顫え
 ねばならぬ。余の膝掛ひざかけと洋傘ようがさとは余が汽車から振り落さ

れたとき居士が拾ってしまった。洋傘は拾われても雨が降らねば入らぬ。この寒いのに膝掛を拾われては東京を出るとき二十二円五十銭を奮発した甲斐がない。

子規と来たときはかように寒くはなかった。子規はセル、余はフランネルの制服を着て得意に人通りの多い所を歩行あるいたことを記憶している。その時子規はどこからか夏蜜柑なつみかんを買うてきて、これを一つ食べと言って余に渡した。余は夏蜜柑の皮を剥むいて、一房ひとつぶさごとに裂いては噛み、裂いては噛んで、あてどもなくさまようていと、いつのまにやら幅一間ぐらいの小路しょうじに出た。この小路の

左右に並ぶ家には門かどなみ並方一尺ばかりの穴を戸にあけてある。そうしてその穴の中から、もしもしという声がする。はじめは偶然だと思っていたが行くほどに、穴のあるほどに、申し合あわせたように、左右の穴からもしもしという。知らぬ顔をして行き過ぎると穴から手を出して捕とらまえそうに烈しい呼び方をする。子規を顧みてなんだと聞くと妓楼ぎろうだと答えた。余は夏蜜柑を食いながら、目分量で一間幅の道路を中央から等分して、その等分した線の上を、綱渡りをする気分で、不偏不党に練って行った。穴から手を出して制服の尻しりでも捕まえられては容易ならんと思

つたからである。子規は笑っていた。膝掛をとられて顫えていゝ今の余を見たら、子規はまた笑うであろう。しかし死んだものは笑いたくても、顫えているものは笑われたくても、相談にはならん。

かんかららんは長い橋の袂たもとを左へ切れて長い橋を一つ渡つて、ほのかに見える白い河原かわらを越えて、藁葺わらぶきとも思われる不揃ふそろいな家の間を通り抜けて、梶棒かじぼうを横に切つたと思つたら、四抱よかかえか五抱いつかかえもある大樹の幾本となく提灯の火にうつる鼻先で、ぴたりと留まつた。寒い町を通り抜けて、よくよく寒い所へ来たのである。遙はるかなる頭の

上に見上げる空は、枝のために遮さかられて、手の平ひらほどの奥りようしに料峭しやうしやうたる星の影がきらりと光を放った時、余は車を降りながら、元来どこへ寝るのだらうと考えた。

「これが加茂の森だ」と主人が言う。「加茂の森がわれわれの庭だ」と居士が言う。大樹を繞めぐって、逆もとに戻ると玄関に燈ひが見える。なるほど家があるなと気がついた。

玄関に待つ野明のあきさんは坊主頭である。台所から首を出した爺じいさんも坊主頭である。主人は哲学者である。居士は洪川こうせん和尚おしやうの会下えかである。そうして家は森の中にある。後うしろは竹藪たけやぶである。顫ふるえながら飛び込んだ客は寒がりで

ある。

子規と来て、ぜんざいと京都を同じものと思つたのはもう十五六年の昔になる。夏の夜の月円まるきにきよみず乗じて、清水の堂を徘徊はいかいして、明あきらかならぬ夜よるの色をゆかしきもののように、遠まなこく眼を微茫びぼうの底に放つて、幾点の紅灯に夢のごとく柔やわらかななる空想を縦ほしいまままに酔えわしめたるは、制服ボタンの釦しんちゆうの真鍮と知りつつも、黄金こがねと強しいたる時代である。真鍮は真鍮と悟つたとき、われ等らは制服を捨てて赤まる裸はだかのまま世の中へ飛び出した。子規は血を嘔はいて新聞屋となる、余は尻しりを端折はしよつて西国さいこくへ出奔しゅつぽんする。お互の

世はお互に物騒ぶっそうになった。物騒の極子規はとうとう骨になつた。その骨も今は腐れつつある。子規の骨が腐れつつある今日に至つて、よもや、漱石が教師をやめて新聞屋になろうとは思わなかつたろう。漱石が教師をやめて、寒い京都へ遊びに来たと聞いたら、まるやま円山へ登つた時を思い出しはせぬかというだろう。新聞屋になつて、ただす糺もりの森の奥に、哲学者と、ぜんこじ禅居士と、若い坊主頭と、古い坊主頭と、いっしよに、ひっそりかんと暮しておると聞いたら、それはと驚くだろう。やっぱり気取っているんだと冷笑するかもしれぬ。子規は冷笑が好きで男であつた。

若い坊さんが「お湯におはいり」と言う。主人と居士は余が顫えているのを見兼て「公、まずはいれ」と言う。加茂の水の透き徹とおるなかに全身を浸つけたときは齒の根が合わぬくらいであった。湯に入つて顫えたものは古往今来たくさんあるまいと思う。湯から出たら「公まず眠ねぶれ」と言う。若い坊さんが厚い蒲ふとん団ふとおりを十二畳の部屋へやに担かつぎ込む。「郡内か」と聞いたら「太ふと織おりだ」と答えた。「公のため

ために新調したのだ」と説明があるうえは安心して、わがものと心得て、差支さしつかえなしと考えたゆえ、御免ごうぶを蒙かぶつて寝る。

寝心地ねごこちはすこぶる嬉うれしかったが、上に掛ける二枚も、
 下へ敷く二枚も、ことごとく蒲団なので肩のあたりへ糺
 の森の風がひやりひやりと吹いてくる。車に寒く、湯に
 寒く、はては蒲団にまで寒かったのは心得ぬ。京都では袖そで
 のある夜着よぎはつくらぬもののよしを主人から承って、京
 都はよくよく人を寒がらせる所だと思ふ。
 真夜中まよなかごろに、枕頭まくらもとの違棚ちがいだなに据すえてある、四角の紫し
 檀製たんせいの柶わくに嵌はめ込まれた十八世紀の置時計が、チーンと
 銀腕ぎんわんを象牙ぞうげの箸はしで打つような音を立てて鳴った。夢のう
 ちにこの響を聞いて、はっと眼を醒さましたら、時計はと

くに鳴り已^やんだが、頭のなかはまだ鳴っている。しかもその鳴りかたが、しだいに細く、しだいに遠く、しだいに濃^{こまや}かに、耳から、耳の奥へ、耳の奥から、脳^{のなか}のなかへ、脳^{のなか}のなかから、心の底へ浸み渡って、心の底から、心のつながるところで、しかも心の尾^ついてゆくことのできぬ、はるかなる国へ抜け出して行くように思われた。この涼しき鈴^{りん}の音が、わが肉体を貫いて、わが心を透^{すか}して無限の幽境に赴^{おもむ}くからは、身も魂も氷盤のごとく清く、雪甌^{せつおう}のごとく冷^{ひやや}かでなくてはならぬ。太織^{ふとおり}の夜具^{やぐ}のなかなる余はいよいよ寒かった。

暁は高いけやき 櫻の梢こざえに鳴くからす 鳥で再度の夢を破られた。

この鳥はかあととは鳴かぬ。きやけえ、くうと曲折して鳴く。単純なる鳥ではない。への字鳥、くの字鳥である。加茂の明神がかく鳴かしめて、うき我われをいとど寒がらしめたもうの神意かもしれぬ。

かくして太織の蒲団を離れたる余は、顫えつつ窓を開けば、依い稀きたる細雨は、濃こまやかに糺この森を罩こめて、糺の森はわが家を遶めぐりて、わが家の寂然せきぜんたる十二畳は、われを封じて、余は幾重いくえともなく寒いものに取り囲まれていた。

春寒さむの社頭に鶴を夢みけり

(明治四〇・四・九―一二)

日本文学電子図書館

京に着ける夕

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第4巻」角川書店
昭和41年4月20日7版発行



日本文学電子図書館